

經濟論叢

第七十卷 第六號

金融論特集

- 預金通貨と流動性及び利子 …… 中谷 實 (1)
- リカード貨幣信用論の一考察 …… 小野一一郎 (23)
- 價值及び價值形態の一考察 …… 三上正之 (47)
-

(昭和二十七年十二月)

京都大學經濟學會

價值及び價值形態の一考察

藤塚知義氏著「アダム・スミス革命」

にみられるその叙述に關連して

三 上 正 之

藤塚氏は次の様に考へる。「スミスは彼の二重性そのものによつて、即ち氏によれば、價值規定における投下勞働價值説と支配勞働價值説、剩餘價值説における分解價值説と構成價值説、貨幣論における流通手段としての貨幣と獨立的存在としての貨幣、生産的勞働の規定における、資本と交換せられる勞働と商品を生産する勞働という二重性によつて、資本制生産の內的連關を分析する直接的生産過程において資本の運動を把握するのであり、重商主義と實質的に對立するのであり」(スミス革命二〇三頁) その爲、二重規定の内、第一の規定のみをとつた「リカードはそのことにより重商主義と同一の(單純流通)という原基的領域においての論理形式に逆もどりし、その抽象的對立たるにとどまる」(同二〇八—九頁)となす。

しかし價值規定における投下勞働と支配勞働との二つの規定は全然異質的なものである。そしてこの二つの並存によつてこそ、剩餘價值を生産過程からみちびくことができるとするのは、氏の價值及び貨幣の把握において誤りがあるのではないか? そしてその結果は剩餘價值を生産過程より牛ぜしめることをえず、流通より生ぜしめるこ

とにならぬだろうか？以下、氏の前記著書より、價值・剰余價值及び價值形態（貨幣）についての氏の把握をとりだして検討しよう。

第一節 價值及び剰余價值

(一) 投下労働による價值規定（正確には生産に必要な労働による價值規定）は、商品の價值をその商品の生産に必要な労働量によつて決定するのであるが、その根底は商品を労働の生産物としての共通的性格によつてとらえ、（リカード經濟學諸原理小泉譯二七九頁）そこに商品の交換を可能にする共通的要素をみとめるのであり、それ故にこそ、その價值の大きさは労働の分量即ちその時間的繼續によつてはかられるとなすのである。かくて商品の交換はこの價值の大きさによつて規制されるのであり、それは労働の社會的分割の物的表現にすぎぬとせられる（古典學派の價值論では、こゝで使用價值と價值との矛盾は看過せられるのだが）。

しかるに支配労働價值説は、「労働の價值をもつて商品の價值の標準とする。」即ち、「あたえられた労働量をもつてかかいる商品、又は、あたえられた商品量をもつてかかいる労働量」（剰余價值學說史第一卷（以下テオリン）と略す）費土社版一三三頁）を價值の標準とする。かくてこゝでは労働は他の商品と同様に商品と考えられ、それは價值の内的要因としてはみられず、商品の交換を可能にするものを、商品がその自然的形態とはことなる共通の第三者（人間の労働の對象化としての價值）にひとしいことよりみちびかず、商品の價值としての存在をとらえぬことより、その使用價值のみをみ、そのことより「諸商品が相互に交換せられる量的關係」（テオリン第三卷（以下(3)と略す）改造社版一七一頁）又は「一つの物が交換にさいして他の物を支配する力、いいかえると購買力」（マルサス價值尺度論

玉野井譯一三頁)がその商品の價值であり、それを効用によつて可能になるとする。これは「交換價值がその中で現れる表面的現象」(テオリーン(8)同)のみをみ、交換という事實のみをみて、それに先行しそれを規制する關係を、生産過程にさかのぼつてたしかめないことを意味する。そして商品の相對的價值を規制する處の絶對的價值、價值の自立化は經濟學者の煩瑣な發明であり、(同一六二頁參照)リカードの空想家たることに歸せられるが、それは逆にこの支配勞働價值説の崇物主義たることをしめすにすぎない。「けだし價值なるものは人間間の一關係の・その交互的生產活動における人間の關係たる一社會關係の・物における表現であり、その物的表現であるにすぎぬのに、それを個々の物の(個別的に考察された)特質としてではないにせよ、とにかく物相互間の關係として解釋するからである。」(同一八一頁)

勞働の價值による價值規定(支配勞働價值説)はかくのごとく、生産に要した勞働による價值規定と本質的にことなるのであるが、それは剩餘價值又は利潤の説明において、販賣より生ずる利潤という俗流的見解を示す。

まづ「すべての勞働者が商品生産者であり、その商品を生産するのみならず販賣もすると假定すれば」(テオリーン(1)一三二頁) その場合には勞働の量は事實上、勞働の價值と一致しえた。

しかるに、「勞働條件が土地所有及び資本の形態で勞働者に對立するやいなや、勞働の生産物は勞働者に屬せず、いける勞働の一定量は對象化せる勞働の同一量を支配しない。又は商品に對象化された勞働の一定量は、商品自身に包含されているより以上の生ける勞働を支配する。」(同一三三頁)

しかるに、かゝる資本制生産と共にもたらされた事體に對して、もの相互間の關係を價值とし、勞働が價值の有効要因であることをみない支配勞働價值説では、上述の對象化せる勞働といける勞働との不等價交換を「資本として

しにも固持しているのである。」(テオリーン(1)一三二頁)しかるに氏は反對のことを主張し、しかもそれをマルクスの言葉の引用をもつて正當化しようとする。以下氏の主張を検討しよう。

(二)氏は、國富論第一編第六章の次の箇所、即ち「その完成した製造品を貨幣、労働、又は他の財貨と交換する場合には、この冒險にあえて資本を投ずるこの事業の企業家にもその利潤として原料の價格及び職工の賃銀を支拂うにたるもの以上に何物かゝあたえられねばならぬ。それ故に労働者が原料に附加する價值はこの場合には二つの部分に分解する。即ち、一部分は彼らの賃銀を支拂ひ、他の部分は資本家の前貸した處の原料と労働との全資本に對する利潤を支拂う。」(大内譯(1)以下同じ)一〇二—一〇三頁)についていう。「……………これによつてミスは剩餘價值の眞實の發源を生産過程において認識している。そこではまづ商品の價值は依然として社會的労働、(従つて又投下労働でもあり支配労働でもある)(この点の誤りなることについては後述……筆者)によつて規定され、しかる後に利潤の發源が商品(對象化された労働)と生きた労働との不等價の交換にもとめられている。かくて一商品の他商品又は貨幣との交換(對象化した社會的労働の等價の交換)は、商品と労働との交換(對象化した労働と生きた労働との不等價の交換)とは混同さるべきではないのであるが、しかもミスはこの兩者を混同し、かくて一商品に投下される労働量はそれが支配する労働量を規制する唯一の事情ではなくなることを主張する。(ここで氏は國富論(1)一〇四頁を念頭において)……………それ故ミスはこの混同と矛盾とは彼が剩餘價值の發源を事實上生産過程においてみていることに由來する。」(ミス革命三五頁)

しかしスミスの労働と労働の生産物との混同、及びそれが誘引となる處の労働の價值による價值規定という、商品の生産に要した労働による價值規定とは全然異質的な規定の混入は、即ち、上記の國富論の引用箇所における

「完成された商品の、貨幣、労働又は他の商品に對する交換云云」における、正しくは労働の生産物とすべきを労働としたことは、すぐつゞいてスミスが「労働者が……附加する價値は二つの部分に分解される。その中で一部分は勞賃を支拂ひ、他の部分は……利潤を支拂う。」ということにより、その商品の等價交換において利潤が労働者が生産過程においてなす剰余労働より生ずるのであり、商品の不等價交換よりの利潤を即ち賣渡しに基く利潤をいつているのではなく、従つてその價値規定の不確定にもかかわらず、剰餘價値の發源においては正しい價値規定、即ち生産に必要な労働による價値規定をとつていることをみるのである。そこでスミスは、氏のいうごとく「まづ商品の價値は依然として社會的労働（……）によつて規定され、しかる後に利潤の發源が商品（……）」といける労働との不等價交換にもとめられているのではなく、商品の價値がその商品の中にしあげこまれた労働量、資本制生産とともに、その一部は支拂われ、その一部は支拂われない労働量によつて規定され、それにしたがつて交換されるが故に、いける労働はその生産物のすべてを支配せず、労働者が勞賃以上になす不拂労働から利潤がみちびかれているのである。

同様のことはさきに氏ののべた處で、氏が念頭においていた國富論(1)一〇四頁についてもみられる。即ち國富論一篇第六章で「事態がかくなると、労働の全生産物は必ずしも労働者に屬するとはかぎらないことになる。多くの場合においては、彼は彼を備うところの資本の所有者とこれを分割しなければならぬ。又、こうなれば、ある物品の獲得又は生産に普通に要する労働の量は、通例、その物品をもつて購ひ支配し又はそれと交換される労働の量を律しうる唯一の事情ということもできない。貨銀を前拂し、その労働の原料を供給したところの資本の利潤に對しても又、別に追加量が支拂われねばならない。」という時、スミスは「資本制生産が前提されば、對象化せる労働

は——貨幣又は商品に表わされて——それ自身の中に包含されている労働量の外に、常になお、いける労働量の『附加された量』を資本の利潤のためにかう」(テオリン(1)一四四頁)というのを、「對象化された労働がいける労働の一部分を無償で取得する事、即ちこれを支拂ふことなしに取得すること」(同上)から導いているのであり、即ち生産に必要な労働による商品の價值規定の固持により、商品と労働との不等價交換をみちびいているのであるから、この不等價交換は剩餘價值を生産過程からみちびくことを意味する。労働と労働の生産物との混同、又はそれが誘引となる處の労働の價值による商品の價值規定は、(それは「對象化せる労働といける労働との間の(資本制生産と共に生ずる)變化された關係によつて、又一つの變化が商品の相對的價值決定にあらわれる、という見解につきまといわれる」(同一四四頁) こととなるのだが) ここでその誤れる價值規定をとらず、正しい生産に必要な労働による價值規定をとることにより剩餘價值の性質及び發源についての記述に支障を來してはいないのである。そして藤塚氏が上記の個所につき「スマスは労働と労働の生産物とを混同し、かくて一商品に投下せられる労働量は、それが支配する労働量を規制する唯一の事情ではなくなり……スマスはかく剩餘價值を考察する……云云」といわれる場合、氏は、スマスが商品の生産に必要な労働による價值規定からの結論としてではなく、たゞ、商品(對象化された労働) はより大なるいける労働と交換せられるものだといつていると理解する。即ち「支配労働の概念は……いきた労働に對する支配を意味するから、……資本の價值増殖の問題……と關連する」とみることになる。(スマス革命三大頁)

しかし氏のいうごとく「労働と労働の生産物との混同にもとづいて」即ちそれが誘引になる處の労働の價值による商品の價值規定、換言すれば支配労働價值説にもとづいて、利潤を求めるならば、それは前述のごとく商品を労働

者に對し商品のうり手にとつてついやしたよりも高くうるのみならず、商品についやしたよりも高くうることでより利潤をもとめることになるのであり、商品といける労働との不等價交換は、資本としての商品又は貨幣の價值増殖ではなく、その商品としての商品の價值とせられるのである。氏は右のごとき不都合よりまぬかれるために、「ミスは事實上、一般的社會的労働を把握しているからこそ、投下労働と支配労働の二重の規定を並置する」といひ（同三三頁）支配労働による價值規定は商品の生産に必要な労働による價值規定と矛盾するものではないかのごとくいうことによつて、「まづ、商品の價值が社會的労働によつて規定され、しかる後に利潤が、商品と生きた労働との不等價交換によつて生ずる」となし、氏がミスをして販賣より利潤を生ぜしめたことを隠蔽しようとする。しかしかかることは價值規定についていいえないのである。

(三) 氏が「商品の社會的労働による價值規定が投下労働（による價值規定）でもあり、支配労働（による價值規定）でもある」とする根據はミスの次の文章についてマルクスがのべる處である。

即ち、ミスは國富論第五章で、「……一度分業が行われるようになると、……彼は彼の支配しうる労働の量、言葉をかえていえば、彼が、買うことの出来る労働の量によつて、或は富み或は食しい。そこである物品の價值はそれを所有するが、しかしそれを自ら使用し又は消費しようとは思わず、それを以て他の物品と交換せんことを欲する人にとつては、その物品が彼をして購入せしめ、又は支配せしめる處の労働量にひとしい……」（譯(1)六七頁）とのべているが、これに對してマルクスは「……で重点がおかれているのは分業及び交換價值と共にもたらされる私の労働と他人の労働の、換言すれば社會的労働の等置であつて……決して對象化された労働と生きた労働の間の區別ではなく、又その交換の特殊な法則でもない。實際においてミスはここで商品の價值がその中に包含されている労働時

間によつて決定され、且商品の所有者の富は彼が處理しうる社會的労働の量に存するということをいつてにすぎない。」(テオリオン(1)一三七頁)といつてゐる。そしてそのことから藤塚氏は「マルクスはこの二つの規定(投下労働によるそれと支配労働によるそれ)の並列そのものの中に、價值をつくる労働としての一般的社會労働が事實上把握されていることをみている。」(スミス革命三一頁)といわれる。しかしマルクスは「……ここで重点がおかれるのは……決して對象化された労働といける労働との區別でもなく、又その交換の特殊な法則でもない。」ということによつて、スミスが「商品の價值は……それが彼をして購入せしめ又は支配せしめる處の労働の量にひとしい。」という時、その労働はいける労働として商品(對象化された労働)と區別され、又その特殊な交換が、又それによる價值規定(支配労働による價值規定)が、のべられてゐるとはみていないのである。マルクスの理解は次のようである。さきに引用した箇所及びその後の箇所「スミスは『他人の労働』と『この労働の生産物』を混同してゐるのであり」(テオリオン(1)一三六頁)「それはここでは無論、すでに商品の價值の、それに包含されている労働量による決定と、その商品がかいりうるいける労働量によるその價值の決定、即ち『労働の價值』によるその決定との間の混同への最初の誘引をあたえてゐるのである」(同(1)一三七頁)が、それは誘引にとどまるのであり、彼がいつてゐるのは「分業の行わるゝに至つた後は、彼の富は彼がかいりうる他人の商品の中にある。即ち、その商品の中に包含されてゐる他人の労働の量のうちに、即ち物質化された他人の労働の量のうちにある。そしてこの他人の労働の量は彼自身の商品のうちに包含されてゐる労働量にひとしい。彼が明白にいつてゐるように『それら(商品)は、一定量の労働の價值を包含し、これを吾吾が、いま假定にしたがつて同一の量の價值を包含してゐるものに對して交換する』」(同(1)一三六頁)といふことである、とマルクスは理解してゐる。「ここでは交換價值の概念……のみが包含さ

れている」(同一三七頁)のであり、それは生産に必要な労働による商品の價值規定である。即ち藤塚氏のごとくこの二つの規定の並存をみていないのである。それ故、氏が「マルクスがこの二つの規定の並存そのものの中に社會的労働が把握されていることを見ている。」というのはマルクスを歪曲するものである。

即ち氏が「商品の價值は社會的労働(従つて投下労働でもあり支配労働(商品によつて支配される生ける労働)でもある)によつて規定される……」という時、氏は「流動的狀態における人間の労働力、即ち人間の労働は價值を形成するが價值ではなく、それは凝固した狀態において、對象的形態において價值となる」(資本論青木版(1)一三九頁)ことをみないのである。それ故、氏は商品と商品との交換を可能にするのがそれらの價值の大きさとして同單位の表現であるからであり、かゝる價值の大きさが交換を規整することを看過し「交換を諸對象が自然物としてもつ處の關係」(テオリオン(3)一七六頁)即ちそれらのものが自然物として自然的欲望に對してもつ關係」となし交換によつて價值がぎまるとする。勿論氏は商品の價值は社會的労働によつて規定されるというのであるが、氏の商品價值の本性の把握の欠如は、商品が交換される數量を決定するものをそれらの効用の程度としてしまうのである。そしてこのことはスミスの正しい價值規定の放棄であり、その弱い面の強調である。そして労働を價值の源泉、價值を生産するものとしてとらえていないことであり、生産過程より剰余價值をみちびくことを不可能にする。即ち氏の價值規定は支配労働價值説と本質的にことならず、商品(對象化せる労働、氏に従つて正確にいえばいくばくかの労働を要した商品)と、生ける労働との不等價交換は、氏ではその商品についてやしたよりも高くうることであり、資本としての商品又は貨幣の價值増殖ではなく、又一方それを商品としての商品の價值となすことを氏の價值規定はさまざまない。何故なれば氏では労働は對象化されてその商品の價值となるのではないから、労働と交換價值との關係は表面的にのみとらえられ

(事實上後者は氏によつては交換が決定することになる) その二者の間に、ある比例が存することのみをみるのであるから。そしてそのことはその労働が商品の生産に投下せられた労働であろうと、商品が支配する労働であろうとそれは氏にとつては關知しない處たらしめるのであり、労働價值説の放棄とならしめるのである。かゝる氏の流通の現象のみをみる價值規定及び剩餘價值の把握は貨幣について同様の展開を示すことを次にみよう。

第二節 價值形態及び貨幣

氏はいう「流通手段としての孤立的な貨幣の把握は古典學派の貨幣論の基本をなすとはいへ、その展開はもともと單純商品流通というモノエタール・システム(重金主義)と同じ論理分野の中で發展しうるものであり、その故に抽象的對立たるにすぎず」(スミス革命七四頁) ……スミスは流通手段としての貨幣規定と獨立的存在としての貨幣規定(蓄藏貨幣、支拂手段、世界貨幣)との並列によつて重商主義を抽象的にのみならず、實質的に(信用制度の展開として)批判し(同二二三頁) ……しかし「スミスの貨幣論において獨立的存在としての貨幣規定が事實的には把握されながら、論理的には明確に把握されないのは ……價值尺度としての貨幣規定を正當に把握していないからであり、それは ……價值形態論の欠如に由來する。」(同八一頁)そして「マルクスは ……價值形態論を展開することによつて ……スミスの二面的な規定を共に包攝する論理を確立をした。」(同二二二頁)

そこで直接にマルクスの價值形態の敘述についての氏の理解を見ることにより、氏がいかに貨幣を把握するかを明らかにしよう。

氏の價值形態についての叙述をみる前に一言しておく。

商品生産においては生産に支出された人間の労働が、商品という使用價値の對象的屬性として、その使用物の價値として表示され、「社會的労働に對する一の必然的な商品の形成過程に内在的な關係」(資本論(1)二一七頁)は、「物象と物象との社會的關係として現象するのである」(同一七四頁)が、商品 A の他の商品 B との社會的關係又は價值關係は量的な交換比率のみを示すのであらうか？ 即ち「 x 單位 A = y 單位 B」という商品 A の價值表現における「等式符號は一般に相互に交換される數量から生じるものであるか？ 〓は交換の事實を表現するにすぎぬか？」(テオリーン(3)一七四頁)もしそうだとすれば「兩者が交換される關係は云爲されないで、兩者が交換された關係のみが云爲されるにすぎぬであらう。果して關係の規定が交換に先行するとすればかゝる二商品の價值關係又は社會關係はかゝる交換を決定する關係であり、かくて我々は(商品 A および商品 B を)支配するものであり、兩者と別物である處の「關係にまで下降しなければならぬ」(同一七四頁參照)そしてかゝる商品の自然形態とはことなる價值としての等置をこの價值關係において理解することによつてのみ、かゝる價值關係のうちには價值の現象形態を把握することができる。そして、何らかの商品 B での表現は、商品 A を商品 B との交換關係におく」(資本論(1)一五六頁)のであり、「價值は交換關係にひとしい」。なぜなれば、「交換の中には、交換という單なる事實のみではなく、同時に一定の關係が表示さるべきである」から。(テオリーン(3)一八〇頁)

そして二商品 A の B との價值關係のうちには、二商品がそれに於て交換せられる量的比率又は交換という事實のみをみるならば、かゝる「現實的過程」(同一六七頁)を可能にする商品の價值としての定在、及びその表現たる「理論的過程」(同上)が、かゝる現實的過程を支配することを見失うのであり、交換關係による價值の表現以外

には價值は存しないことになる。

勿論、商品 A の商品 B との、使用價值より區別された價值としての等置を、單なる等置とし、具體的勞働と人間的勞働との二者斗争的性格がかゝる關係をもたらしことを看過するならば、「價值形態は商品の本性にとつてどうでもよいものとなり、ブルジョアの生産様式を社會的生產の永遠的な自然形態とみあやまる」(資本論(1)一八五頁) ことになり、古典學派が不十分ながらも價值の大きさを把握したにもかゝらず、それより貨幣形態、資本形態への展開を不可能にした轍をふむことになるのだが。

氏は、簡單な單獨又は偶然的な價值形態(形態 I)

X 商品 A = Y 商品 B 即ち X 量の商品 A は Y 量の商品 B に値する。

(20) X 量の商品 A は Y 量の商品 B に値する。

について次のようにのべる。「リンネルは自らの價值を他の商品たる上衣に對する價值關係においてのみ表示し、上衣は他の商品たるリンネルの價值表現の材料としてのみ直接に交換可能な(價值存在をもつた) 使用價值の形態を、等値の形態をうけとる。」と。(スミス革命八二三頁)

氏は右の個所においてただ「リンネルは自らの價值を他の商品たる上衣に對する價值關係においてのみ表示し」といつて「リンネルがその『等價』あるいは、『交換されうるもの』としての上衣に關連することによつて、「リンネルの價值……が表現せられる」(資本論(1)一三七頁) ことを明示しない。それは二商品の價值關係のうち二種類の商品の一定分量がそれにおいて相互にひとしいとされる比率のみをみ、かゝる量的に比較することを可能にする二商品の價值としての等置をみないから、かゝる價值としての等置たるリンネルの上衣に對する價值關係

が、使用物の對象的屬性としての價值の現象形態を、即ち二商品が相對的價值形態と等價形態とに自らを配分することを媒介してのリンネルの價值表現を、提供することを明確に打出さず、上衣の等價形態をかゝる關連より獨立に上衣に附着せしめ、その社會的な自然屬性とする。かくて氏ではリンネルがその價值を上衣の使用價值で表現することにより、後者そのものに「等價という形態をおしつける」(資本論(1)一四六頁)のではなく、かゝる關連より獨立して「上衣はリンネルの價值表現の材料として」存在するのであり、上衣の等價形態が、リンネルの上衣に對する關連によつてではなくて、「(上衣の)リンネルに對する關係(によつて)上衣に附屬する」(スミス革命八四頁)ことになる。

そして、氏が「直接に交換可能な(……)使用價值の形態即ち等價の形態」ということを検討すると、第一に、この形態 I では「上衣はリンネルの相對的な價值表現においてはリンネルというこの單獨な商品種類に關連しての等價形態——又は直接的な交換可能性の形態——をとるにすぎない」(資本論(3)一五六頁)のに、氏にあつてはこのリンネルの上衣によつての相對的價值表現が上衣に等價形態をおしつけるのではないのだから、「直接的に交換可能な……」といつて、かゝる限定を附さない。第二に、「商品の等價形態を交換可能な使用價值の形態」といつて「交換可能性の形態」といわないのは、それにおいて「使用價值がその對立者たる價值の現象形態になる」ことをみないのであり、かくて二商品 A と B との關係は使用價值同志の關係であり、交換關係による價值の表現以外には價值は存しなく、「商品の簡單な價值形態が、その商品にあくまれている使用價值と價值との對立の簡單な現象形態である」(同一五五頁)ことをみない。

かゝる等價形態の把握は氏をして形態 I について注意すべき第二の点として次のようにいわしめる。即ち「この 20 商品のラベネム = I 枚の上衣とどう關係は……(これは「質的に等置されたこの二商品は同じ役割を演ずるのではな

く」(同二三七頁)「第一の商品は能動的役割を演じ、第二の商品は受動的役割を演ずる」(同二三四頁)ことの看過であり、正しくはリンネルの價值表現である。《筆者》……同時に an sich と、逆の關係、即ち、1枚の上衣 = 20 マルクの コクネン とさう關係(即ちリンネルが等價として働くところの價值關係)……(即ち等價形態の虚偽の假象《筆者》)をふくんでいることと換言すればリンネルが相對的價值形態をとることの中には、リンネルが同時に等價の性質をもつことが an sich に含まれている。「この点は形態Ⅱ(全体的な又は開展された價值形態)より形態Ⅲ(一般的な價值形態)が發展するときの伏線をなす」(「社会革命」三頁)と。

即ち上衣の等價形態を、リンネルの上衣との關連より獨立に上衣の自然屬性とすることより、二商品が同時に等價たること、氏によれば直接的に交換可能な使用價值(の形態)であることが當然とせられるのである。

「勿論、20 マルクの コクネン = 1 枚の 上衣」というリンネルの價值表現は、1 枚の 上衣 = 20 マルクの コクネン という逆の連關をも含んでいる。しかし上衣の價值を相對的に表現する爲には、私はとにかく、かの方程式を顛倒しなければならぬのであり、」(資本論(1)一三五頁)そうする時にのみ上衣のかわりにリンネルが等價となる。「だから同じ商品は同じ價值表現においては同時に双方の形態であらわれることはできず、むしろ對極的に排除しあうのである。」(資本論(1)一三五頁)

リンネルが上衣と交換關係、價值關係にあるということは、商品の使用物の對象的屬性たる價值としての同等性より生ずるのであり、その價值が等價としての上衣との關連によつて現出するということは、リンネルという商品に内在的な使用價值と價值との對立的表示なのであり、氏が同じ商品は同じ價值表現に於ては同時に相對的價值形態と等價形態との兩方の形態をとることはできぬという事をみないのは、商品 A の商品 B との價值關係又は交

換關係において、それによつて二商品が互に交換せられる量的比率のみをみ、價值としての等置をみず、かゝる價值關係が内包する商品Bの自然的姿態による商品Aの價值表現を商品Aの使用價值と價值との對立の簡單な外的表示とみないことによる。勿論、「直接的な生産物交換では交換財貨はそれ自身の使用價值又は交換者の個人的欲望から獨立する價值形態をうけとらず」、(資本論(1)一九七頁)したがつて形態Iでは「價值形態の兩極的對立をとりおさえるにはまだ骨がおれる」(同165頁)のであるが、交換において交換という事實のみをみ、かゝる二商品の交換關係が内包する簡單な價值形態において、商品に内在的な使用價值と價值との對立の簡單な外的表示をみないことは、かゝる對立が交換の歴史的な擴大及び深化により増大することが、商品價值の自立的形態を追求し、商品と貨幣とえの商品の二重化によつてかゝる形態が窮極的に達成されるまでは止りも休みもしない(同195頁參照)ことを、みることをできなくする。

即ち氏はさきに形態Iにおける上衣の等價形態を上衣という單獨な商品種類に關連しての等價形態又は直接的交換可能性の形態であるという限定をふさなかつたが、氏はさらに形態Iについて注意すべき第一の点として、形態Iについて第一の商品の價值がよつてもつて、表現せられる他の種類のたゞ一つの商品が即ち「第二の商品がどんな種類のものであるということ……は全くどうでもよいことである」(同156)ということ、即ちIでは他の種類のたゞ一つの商品であればよいということをもつて、「等價形態にある商品・上衣は商品一般の代表としての一商品である。」となし(スミス革命入三頁)形態Iと形態II・即ち全体的な又は開展された價值形態

2商品A=n商品B 又は=v商品C 又は=w商品D 又は=等々

(20ポンドのリンネル=1枚の上衣 又は=10ポンドの茶 又は=40ポンドのコーヒー 又は=2オンスの金 又は

との本質的な區別を捨象する。しかるに形態Ⅱにおいては「二人の個別的な商品所有者の偶然的な關係はみられなくなり」(資本論(1)二六八頁)「リンネルはその形態によつて、いまや實にもはやある單獨の他の商品種類ばかりとではなく、商品世界と社會的關係をむすんでいる」(同一五七頁)のであり、「同時に商品價値の諸表現の系列が無限だということのうちには、商品價値はよつてもつてそれが現象する使用價値の特殊の形態には無關心だということがよこたわつている。」(同上)即ち商品の價値のその使用價値よりの自立化の過程の進展。(しかしこの形態では商品の使用價値よりのその價値の自立化はまだ達成せられていない。そして「各商品の相對的價値形態は、他の各商品の相對的價値形態とは異なる價値諸表現の無限の系列である。」という「開展された相對的價値形態の欠陥はこれに照應する等價形態に反映する。」(同一五九頁) かくて「どの特殊な商品等價にもふくまれている一定の具体的な有用的な労働種類は、人間の労働の特殊な、かくして十全ならざる現象形態たるにすぎぬ。」(同一六〇頁)そして「人間的な労働は、かの特殊な現象形態の總範圍においては、その完全な又は全体的な現象形態をもつが、その場合でも、それは何ら統一的な現象形態をもたないのである。」(同上)が、氏は、形態Ⅰに於て二商品の價値關係に於て量的交換比率のみをみて、關連と商品Aが商品Bとむすぶ商品の價値表現との有機的連繫を見過し、そこに内在的な使用價値と價値との對立の外的表示をみないことにより、形態ⅠとⅡの相異を没却してしまつたが、かゝる氏の觀點は、さきの氏のいわゆる形態Ⅰで注意すべき第二点即ち「リンネルが相對的價値形態にあることは同時にリンネルが等價の性質をもつことを *an sich* にふくんでいる」をもつて、形態Ⅱより一般的價値形態(形態Ⅲ)への發展をみちびくことになり、形態Ⅲにおける商品價値の使用價値よりの自立化をみることをできなくする。

即ち氏は、一般的な價值形態（形態Ⅱ）

1枚の上表＝

10ポンドの茶＝

2オンスの金＝

20マルクのリンネル

銀々の時計＝

に於て「一般的な價值形態は價值一般の形態であるから、それはどの商品にでも歸屬しうる」（資本論(1)一六七頁）ということをもつて、「すべての商品は一般的等價たる性質を *in sich* にもつてゐる」（スミス革命八五頁）となす。即ち形態Ⅰについて注意すべき第三点として「相對的價值形態にある商品リンネルも商品一般の代表としてとりあげた商品であつて……（この点は形態Ⅱから形態Ⅳ〔貨幣形態〕が發展するとき立證される）」（同八三頁）ということにより、形態Ⅰにおいて偶然的に相對的價值形態をとつた商品は、すべて形態Ⅱにおいて、たとひ一般的等價たりうるのみでなく、一般的等價であるとするのであり、氏では形態Ⅱは「各商品が一般的等價たることを主張し、互に一般的等價たることを拒みあう」ところの矛盾した形態となり、「この矛盾は諸商品がそのもつ一般的等價たる性質をはきだして、たゞ一つの排除された商品（金）にならしめることによつてのみ即ち次の貨幣形態においてのみ解決される」（スミス革命八五頁）とする。これは前述のごとく、形態Ⅱにおいては商品は統一的價值形態をもたなかつたのが、交換の歴史的な擴大及び深化により「商品價值が人間の労働一般の物質化にまで擴つてゆく」（資本論(1)一九八頁）のと共に一商品を商品世界より排除し、それと他のすべての商品が全面に關連し、それによつて價值を表示するが故に、この排除された商品が一般的等價となり「商品（リンネル）の物的形態はあらゆる人間の労働の目にみえる化身、社會的蛹化として意義をもつ」（同二六四頁）のであり又「各商品の價

ものでしかありえないのである。そして氏が貨幣形態の表面のみをみて、その基礎にきづかないことは氏をして次のような結論にみちびく。即ち氏が「 $W-W$ なる關係が $W-G$ なる關係に轉化するという時、 x 商品A $=y$ 商品Bを x 商品A $=y$ 商品Bとするのは、氏が形態Iにおいてその商品Aの商品Bとむすぶ價值關係を價值としての等置としてその提供する商品Aの價值の現象形態を追求せず、二商品がそれによつて交換せられる量的比率のみをみ、そこに交換という、事實のみをみることによるのであり、もしこの關係を量的比率より抽象して考察すれば、商品Aの商品Bによる價值表現は「商品Aの價值を一定量の等價即ち「商品Bは商品Aと直接に交換されるものだ」ということによつて表現するのであり、決して逆に商品Aの方が商品Bと直接に交換されうるものだということによつて表現するのではなく」(資本論(二)一八頁)これは商品Aが商品Bと交換されるべき關係をしめすのであり、單なる交換という事實のみを示すのではないことを知る。同様のことは形態VI、 $W=IG$ においては形態Iにおけるよりもさらに明白になる。「商品に價格をあたえるためには表象された金をこれに等置すればたりる。」(同二一九頁)即ち「商品世界にたいし價值表現の材料を提供する」という價值尺度としての機能における貨幣は $W=IG$ であり(氏の考へるように $W-G$ ではない。)觀念的な金でたりるのである。($W-G$ における貨幣は商品の姿体變換及び商品流通を媒介する流通手段としての貨幣である。)そして「諸商品の保護者がだれでもしつているように、たとえ彼が自分の諸商品の價值に價格の形態又は表象的な金形態をあたえても、彼はまたそれらを金化したのではなく。」(同二〇五頁)しかるに x 商品A $=y$ 商品Bを x 商品A $=y$ 商品Bとしてしか理解できぬように $W=IG$ を $W-G$ としてしか理解できぬ氏には、交換關係による價值表示以外に價值は存せず、價格を價值となすことになる。

「しかし商品の價値の大きさの指標としての價格は、その商品の貨幣との交換關係の指標であるとしても、その遊に、その商品の貨幣との交換關係の指標は必然的にその商品の價値の大きさの指標だ、ということにはならない」（資本論(1)二一六頁）。そして「價値の大きさの價格への轉形につれて、社會的労働時間に對する一の必然的なその商品の形成過程に内在的な關係は、一商品のその外部に實存する貨幣商品との交換關係として現象し、……價格の價値の大きさととの間の量的不一致、或は價格の價値の大きさからの背離の可能性は、價格形態そのものの中によこたわつてゐる。」のである。(上二一七頁)

そして貨幣が流通手段として機能するのは (W—G—W) それが商品價値の自立化された價値であるからであり、流通手段としての貨幣の運動は、事實上、諸商品自身の形態運動に他ならない (同二三八頁) のに、貨幣により、運動しない商品が運動するとなし、貨幣の一般的な直接交換可能性をかくる關連より獨立にその社會的な自然屬性とし、それによつて W—G がなされるとする。かくて「價格形態は貨幣とひきかえに諸商品を讓渡する可能性とこの讓渡の必然性をふくむ」(同二一九頁) ので、あるが、「労働生産物を商品に轉化し、労働生産物の貨幣への轉化を必然ならしめるところの分業は、この實体的轉化が成功するか否かを偶然ならしめる」(同二一九頁) というブルジョアの生産様式の基本的性格は氏によつては理解されず、古典派が價値の大きさを不完全乍らもつかみながら、相對的價値形態に重点をおいて貨幣を流通手段としての流動的狀態においてみ、信用の乱用を制限し、それに反感をもつたのに反し、氏は等價形態及びその完成姿体たる貨幣に重点をおきその虚偽の假象にとらわれ、信用の介入によつて、かかる生産様式の基本的矛盾、即ち商品に内在する使用價値價値との矛盾、換言すれば生産の社會的性質と占有の私的形態との矛盾が克服できるとし、信用制度の万能を信するにいたる基礎をこゝで與えているので

ある。

かくて、價值・剩餘價值及び貨幣の把握において、氏が經濟の現象にのみとらわれ、その科學的な分析をなさず、その見解は重商主義的傳統の復活であり、古典學派をそれにひきもどす役割しかしていないことをみるのである。

執筆者紹介

中 谷 實 京都大學教授

小 野 一 郎 京都大學助手

三 上 正 之 京都大學大學院研獎生